

# 隠蔽体質 深い「病根」

## 東京女子医大病院事件

### 記録改ざん「よくある」

### 逮捕の医師「なぜ責められる」

医師2人が検視庁に逮捕された東京女子医大病院(東京都新宿区)は、「トップレベルの心臓手術を誇る施設」と評価される。逮捕された循環器小児外科助手佐藤一樹容疑者(38)と、講師の瀬尾和宏容疑者(46)は、総勢数十人の医療スタッフの中でもベテランだった。なのにミスをした後、記録を改ざんし、問題を隠そうとした。事件からは同病院全体の隠蔽体質が浮かびあがる。

### 医療事故

### 内部告発から公に

しかし病院側は瀬尾医師の独断だったと主張した。分科会のある出席者は、病院の主張から反省の気持ち伝わってこ

ず、言い訳ばかりが目立つた」と話した。

佐藤医師は91年5月に循環器小児科に研修医として入局。97年に助手に昇格した。今回操作を誤ったとされる人工心肺装置の担当者としては経験豊富な医師として信頼されていた。

同病院は特定の学閥がなく、自分の技量に自信を持ってた人が集まるという。2人が所属していた心臓血管研究所は、その中でも「職人の集団」とされる。2人はそこで、着実に地歩を固めていた医師だった。

同大に約10年間、勤務した経験を持つ心臓外科医は「間違いを認めて謝るといった基本的な教育も受けていなかった。心臓手術では日本」というお

「この改ざんは、診療記録の改ざんなどについても内容を明らかにする」と約束した。だが、その後、平柳さんのもとに連絡はきていない。



平柳明香さん  
あると、記録類を直すことは病院でよくあった。なのに、なぜ私だけが責められるのか」  
瀬尾医師は逮捕前、周



記者会見で、頭を下げる東京女子医大病院の林直院院長。28日午後4時27分、東京都新宿区で

「手術でまづいことが、腫にそう語っていたといふ。同医師は、81年5月から同大学の心臓血管研究所に勤務する。執刀医を指導しながら、難易度が高く重要な部分では自らメスを握っていた。今年3月、厚生労働省

の医療分科会で、この医療過誤事件を取り上げられたときのこと。分科会の出席者から「手術はチームで行われており、個人でミスを隠せるものではないはずだ」との意見が相次ぎ、手術ミスの組織的隠蔽が指摘された。

見方もある。

島根県の松江市立病院では99年2月、患者2人の点滴パックを取り違え、2人とも死亡する事故が起きた。しかし、この事故は報道された後も約1カ月間、公表されなかった。病院側は「取り違えたのは栄養剤の一種で、死因とは関係ない」としていた。

東京都の癌研究会付属病院では、99年12月に患者が抗がん剤の過剰投与で死亡した。病院側はその時点でミスに気付いていたが、遺族への説明は2カ月以上たってからだった。

札幌市の中村記念病院でも98年1月、末期がんの男性患者(当時71)が

### 院長「管理責任大きい」

### 関係者の処分を検討へ

2人の医師が逮捕された事件を受け、東京女子医科大病院(東京都新宿区)は28日午後、林直院院長らが記者会見した。林院長は「このような事態を招いた社会的責任を痛感している。心よりおわび申し上げます」と述べた。一方、「管理責任は大きい」と話し、教育

の不徹底やマニュアルの不備を認め、病院にも責任があるのでは」との質問には明言を避けた。会見によると、同病院は遺族の意向を受けて内部調査委員会を設置し、昨年10月に報告書を作った。その過程で、逮捕された2人の医師を含む関

係者から事情を聴いたが、「死因を調べる委員会だったため」(東間副院長)、事実関係の確認をただで済ませたこと、カルテで患者の瞳孔の大きさの記載が7時から4時に書き直されていたことを同委員会でも確認し、瀬尾医師を追及した

「この改ざんは、診療記録の改ざんなどについても内容を明らかにする」と約束した。だが、その後、平柳さんのもとに連絡はきていない。

ある大学病院に勤める内科医は「自分や病院を守るため、カルテの記述には細心の注意を払う必要がある。改ざんや加筆などは論外の時代だ」と話している。

女子医大小児心臓手術事故  
隠蔽体質